商学論集　第60巻第2号　　1991年11月

【研究ノート】

永訣の朝

――心象スケッチ『春と修羅』ノート（上）

神子博昭

構成の問題

心象スケッチ『春と修羅』の構成の中心にあるのは妹〈とし子〉の死である。これはさまざまな意味からして、そうだ。

まづ妹の死にさいしてつくられた『永訣の朝』『松の針』『無声慟哭』の三篇、とりわけ前後の二篇は、スケッチ集のなかではきわだった凝集力を示している。この二篇に詩『春と修羅』をくわえた三篇は自己劇化の衝動にかりたてられていて、宮沢賢治の詩のある極点（行きどまり）を暗示している。

またこのスケッチ集の初版本目次にはそれぞれの詩に創作（着想か？）の日付がつけられている。詩はすべて日付の順に配列されており、さいしょの詩『屈折率』は一九二二年一月六日、さいごの詩『冬と銀河鉄道』は一九二三年十二月十日。そして妹の臨終の詩三篇はこの二年にわたる期間のほぼ中間、一九二二年十一月二十七日である。妹の死という自然の出来事が、ここでは意味となっている。

さらに臨終の詩三篇をかなめのようにして、前後の詩（群）にある対照がうかがえる。詩は八つのグループにまとめられているが、さいごのグループ『風景とオルゴール』の詩群は、さいしょのグループ『春と修羅』の反照であろう。また妹生存中の小岩井行の長篇『小岩井農場』には、死後のオホーツク行の長篇『青森挽歌』が呼応する。

こうして心象スケッチ『春と修羅』の構成の中心に妹の死をおいてみると、この中心からそれぞれの詩篇は意味をうけとることになる。構成のおおよそを示せば、こうだ。――妹の〈無垢〉をささえとして宮沢賢治はおのれの〈修羅〉をひとつの自然性として位置づける。この試みは『小岩井農場』でいちおうの達成を見る。だがこの達成のきわどさをつくようにして妹の死が彼をおそう。彼にはこの死は認めがたい。彼は妹の死をかかえこんで黙す。しかし死者はやはり死なせてやるべきではないか？　こうしてオホーツク行の挽歌が書かれる必然があったのである。――

ふつうならば、これはアドレッセンス（思春期）において純化された無垢願望の終焉のドラマである。ひとはここから生活へと、関係のなかへとためらいながらも一歩をふみだす。しかし宮沢賢治は、そうならなかった。彼の存在と詩が魅惑と異和とを同時にあらわにするところがあるとすれば、それはここである。

心象スケッチ『春と修羅』一巻が構成するのは、宮沢賢治の無垢願望のドラマである。それを論じるわたしの位置は、だから、このドラマを物語る語り手の位置に近づく。

修羅とはなにか

宮沢賢治の妹トシは一九二二（大正十一）年十一月二十七日になくなっている。その日の日付をもつ三篇のうち、さいしょの一篇はつぎのようである。

永訣の朝

けふのうちに
とほくへいってしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ
（あめゆじゆとてちてけんじや）
うすあかくいっさう陰惨な雲から
みぞれはびちょびちょふってくる
（あめゆじゆとてちてけんじや）
青い蕈菜のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがったてっぽうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした
（あめゆじゆとてちてけんじや）
蒼鉛いろの暗い雲から
みぞれはびちょびちょ沈んでくる
ああとし子
死ぬといふいまごろになって
わたくしをいっしやうあかるくするために
こんなさっぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまっすぐにすすんでいくから
（あめゆじゆとてちてけんじや）
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
…ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまってゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまっしろな二相系をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このっややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらっていかう
わたしたちがいっしよにそだってきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

二

もうけふおまへはわかれてしまふ
(Ora Orade Shitori egumo)
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あぁあのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまっしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
（うまれでくるたて
こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる）
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

〈わたくし〉は妹〈とし子〉の死にのぞんでいる。〈わたくし〉は妹からの、なにかひとことを心をはりつめさせてまっている、かのようなのだ。現実の場面としては、おそらく病床の妹トシが、そとへ行きたい、みぞれにぬれて歩いてみたい、冷たい雪を口にふくんでみたい、といったことをふともらしたのだろう。宮沢賢治はそこをとらえる。――〈とし子〉の「あめゆじゆとてちてけんじや（あめゆきとってきてください）」という願いをうけて〈わたくし〉は「まがつたてっぽうだまのやうに」おもてにとびだす。

ああとし子
死ぬといふいまごろになって
わたくしをいつしやうあかるくするために
こんなさっぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまっすぐにすすんでいくから

〈わたくし〉は雪を、妹の「さいごのたべもの」ととらえる。そしてそれをとってきてほしいとことさらに〈わたくし〉にたのむことにより、妹は〈わたくし〉ののこりの一生をあかるくしようとしているのだ、そう〈わたくし〉はうけとる。〈わたくし〉の心は感謝の思いに向って凝集する。また妹の死後が安かれという祈念にこる。

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

ここでは感謝の思いや祈りの念はこれ以上ことばにはなりえないと

三

いったところまでひっぱられている。それは詩というフィクションの枠を破って、感謝そのもの、祈りそのもの、つまり無言の思いになろうとする。読むものは息をひそめていっきに読みぬくしかない、あたかもそう強いられているかのようなのだ。

どうして、こうなるのだろう？　ふともれた妹のひとことから、どうして宮沢賢治はいちずな思いにまでつっぱしるのだろう？　考えられる理由はひとつしかない。――Ora Orade Shitori egumo（あたしはあたしでひとりいきます）。彼には妹がひとりで死んで行くのがどうしても了解できない。いや了解しようとしないのだ。それにもかかわらず目のまえで妹は死んで行く。この矛盾に耐えるには、おのれの全体をあげて感謝し、祈る姿勢をとるしかなかったのである。

それにしても雪を「さいごのたべもの」ととらえるのは、少しへんだ。なぜ雪をたべようとしたのか、雪の地方の習俗でもあるかと伊藤信吉はいぶかっているが（『現代詩の鑑賞　下巻』）、ここには食うことをめぐっての宮沢賢治の暗いわだかまりが影をおとしていると思える。

雪の軌跡をたどってみよう。雪（みぞれ）は「うすあかくいつさう陰惨な雲から」「蒼鉛いろの暗い雲から」沈んでくる。でも「あんなおそろしいみだれたそらから」ふってくるにもかかわらず、雪は「うつくしい」。なぜなら雪は「銀河や太陽　気圏などとよばれたせかい」からおちてくるから。そして妹の口をへたあと、あるいはより正確には、妹の病床におそなえされたあと、雪は「天上のアイスクリーム」となって（もしくはそうなるべく）、ふたたびそらに昇って行く（だろう）。

銀河、太陽、気圏からおそろしい乱れた空をとおっておちてきた雪は、妹のうつくしいたべものであり、天上のアイスクリームとなって円環をふたたびとざす。ここには食うことについての、宮沢賢治の窮極のイメージがある。

四

これとは別な食の円環からくる不安に彼がとらわれていたことはよく知られている。

宮沢賢治は「ビヂテリアン（菜食信者）」であった。『ビヂテリアン大祭』はその信者らのつどいの様子をファルス（寸劇）風にえがこうとした短篇である。

ある年の九月、ニュウファウンドランド島の小さな山村でビヂテリアン大祭が行なわれ、「私」は日本の信者一同を代表してそれに参加した、というのがこの話の場面設定である。大祭の式典にはアンチ・ビヂテリアン、「異教徒」も列席し、つぎつぎとビヂテリアンに反問し、それにたいしてこちらも即座に論駁して行く。さいごにある仏教徒がたちあがり、釈迦は肉食を禁じなかったと演説すると、「私はこの時あんまりひどい今の語に頭がフラッとしました。そしてまるでよろよろ出て行きました」

「私」は無我夢中で論じる。すべての生物は昔から流転に流転を重ねてきた。あるときはひとに、あるときは畜生に、あるときは天にうまれかわる。「だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。異教の諸氏はこの考をあまり真剣で恐ろしいと思ふだらう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ」――

「私」が演説をおえると場面は急転する。異教徒と思われた一団の人人の反論はじつは演技であり、すべては式典の余興だった。式場は哄笑歓呼拍手でいっぱいになるが、「けれども私はあんまりこのあっけなさにぼんやりしてしまいました」――心の奥底に自分でも知らずに

ひめていた不安を思わず口にのぼせてしまった「私」は当然ながら周囲ののんきな状況とはそぐわない。こうして一篇はファルスになりそこなう。笑いになりきらぬものを作品の底によどませるのだ。

生きものの体をくらうことは親兄弟の変り身をくらうことではないか――食うことをめぐる不安は、このような食の円環にたいするおびえとなってあらわれる。

一九一八（大正七）年五月十九日、宮沢賢治は親友保阪嘉内にあてつぎのように書いている。

私は春から生物のからだを食ふのをやめました。けれども先日「社会」と「連絡」を「とる」おまじなゐにまぐろのさしみを数切たべました。……食はれるさかながもし私のうしろに居て見てゐたら何と思ふでせうか。

……もし又私がさかなで私も食はれ私の父も食はれ私の母も食はれ私の妹も食はれてゐるとする。私は人々のうしろから見てゐる。「あゝあの人は私の兄弟を箸でちぎった。となりの人とはなしながら何とも思はず呑みこんでしまった。……われらの眷族をあげて尊い惜しい命をすてゝさゝげたものは人々の一寸のあはれみをも買へない。」

私は前にさかなだったことがあって食はれたにちがひありません。

さかなを食うとき、食われるさかなが背後にたって見つめている、と想像することはどう考えてもふつうではない。ここにはものを食って自分を維持するしかない生きものの根本的な条件にたいして、本質的なところで了解が欠落しているとしか思えない。

推察するに妹トシは病床にあって食が細かったであろう。死が近づくにつれ、ほとんどたべものをうけつけないこともしばしばであったろう。肉親相食む食の悪しき円環におびえていた宮沢賢治の目に、妹トシの食の細さ、というよりその不可能はどううつったか？　気圏からおちてくる雪が「たべもの」で、それこそ「天上のアイスクリーム」である、とは彼のとらわれている悪夢のような食のイメージが自らの対極にえがきだした食の円環だ。これはたしかに臨終の場における極端な思いではあろうが、それまでにも妹の食の細さ、その不可能に意味を見出して行こうとするかたむきがなかったか、どうか。ところが自らのかたむきを肯定すればするほど妹トシの実際の肉体はおとろえはてて行くのである。この矛盾に彼が無自覚であったとは思えない。「天上のアイスクリーム」を祈る、その念のはげしさはかえって矛盾の自覚を暗示している。「ふたきれのみかげせきざい……のうへにあぶなくたち」雪をとる姿勢そのままに、ふたつの食の円環の狭間に宮沢賢治はあやうくたちすくむのである。

妹トシは一九二一（大正十）年六月ごろ不治の病の床についている。臨終詩篇の第二篇『松の針』では自責の念をこめながら、つぎのように一九二二（大正十一）年の春または夏のことが回想されている。

おまへがあんなにねつに燃され
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた

五

これは一九二二年三月二十日の日付をもつ詩篇のほとんど自家引用である。

恋と病熱

けふはぼくのたましひは疾み
烏(からす)さへ正視ができない
あいつはちやうどいまごろから
つめたい青銅(ブロンズ)の病室で
透明薔薇(ばら)の火に燃される
ほんたうに　けれども妹よ
けふはぼくもあんまりひどいから
やなぎの花もとらない

この詩を書いた時期、宮沢賢治は妹トシと「ほかのひと」のあいだにたって、ひとつの危機にあったと予想される。もちろんこれはふつうの三角関係の危機でもないし、肉親愛か恋愛かという選択の問題でもない。むしろ家族というものに向けられる愛からも、異性に向けられる愛からも身をひいて、いかにしておのれの〈無垢〉をひそかにまもりぬくかという苦闘だった。

さてこれも想像によるしかないのだが、病床の妹トシは宮沢賢治の目には、性的存在としてほとんど中性化されて行っただろう。いのちのヴォルテージを下げて行くトシをまえにして、兄と妹という関係からはあとうかぎり性の側面がとりのぞかれ、のこったのはほんとうに淡い、あるかないかのエロスで結ばれた「双子」のイメージであったろう。しかも家業をつぐのを拒み、家督相続を留保しつづけてきた宮沢賢治としては、この双子はどうしても、親もなく繋累もなく夜どおし天で笛を吹くチュンセ童子とポーセ童子（『双子の星』）のようでなければならなかった。そのような関係にある妹（とし子）にはじめて彼はおのれの〈無垢〉を投影しえたのである。

しかしこの関係に意味をもとめて行けば行くほど、「ほかのひと」との関係は無垢をおびやかすものとしてあらわれる。つまり対他の関係において性を否認したあり方（双子のあり方）を絶対化しようとするため、性は無規定に、ふいに噴出し、彼を不安におとしいれることになるのである。

六

春光呪詛

いつたいそいつはなんのざまだ
どういふことかわかつてゐるか
髪がくろくてながく
しんとくちをつぐむ
ただそれつきりのことだ
春は草穂に呆(ほう)け
うつくしさは消えるぞ
（ここは蒼ぐろくてがらんとしたもんだ）
頬がうすあかく瞳の茶いろ
ただそれつきりのことだ
（おおこのにがさ青さつめたさ）

表出史のうえからいえば一九一七（大正六）年、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』が出版されている。ここではエロスが対他の関係である恋愛にいたらず、生理的な魅惑とおびえのアンビヴァレンツとして表出されている。『春光呪詛』の感受のし方もそれから遠くない。ここでことばを発しているものは、露出してきた性におびえているのだ。「髪」「くち」、そして「頬」「瞳」にどうしようもなくひかれながら、ひかれる自分が不安でたまらない。「蒼ぐろくてがらんとした」ところにいるからおびえるのではない。ひかれ、同時におびえる状態こそ「蒼ぐろくてがらんとした」ところにいることなのだ。この心のうごきは恋愛にまでいたらない。髪、くち、頬、瞳がひとりの異性の像を結ばないのだ。それらは無名の、エロチックなイメージにとどまる。

ここでもまた宮沢賢治は矛盾にぶつかる。妹〈とし子〉との関係の〈無垢〉に執着すれば、「ほかのひと」との恋愛の可能性は性の魅惑とおびえのアンビヴァレンツに解体して行ってしまう。しかも無垢なる〈とし子〉そのものが、彼の願望の投影なのである。〈とし子〉像の背後から妹トシはのがれて行くだろう。

さて、修羅とはなにか？　ここまでくればこの問いにたいして、とりあえずこうこたえられる。それは気圏――雪――天上のアイスクリームという〈とし子〉の食の円環から見たとき、〈わたくし〉は肉親相食む悪しき食の円環にとらわれているということであり、また〈とし子〉との無垢なる関係から見たとき、「ほかのひと」とのそれは性の魅惑とおびえというアンビヴァレンツとしてしかあらわれようがない、そのあり方こそが修羅なのだ、と。

もう半歩、すすめてみよう。

梅原猛は宮沢賢治の思想の中心をなす法華経からの影響をつぎの三点にまとめている（『地獄の思想』）。

(1)　生命の思想
(2)　修羅の思想
(3)　菩薩の思想

宮沢賢治の生命思想の核心をなすのは、人間を物理的化学的な物質と人格とに解体してしまった近代思想にたいするアンチテーゼたらんとする部分である、そう梅原は見る。「人間は、自然の大生命のあらわれのひとつにすぎない。……自然の大生命は、大きな流れである。……この大生命は天地自然に、山川のなかにも、植物のなかにも、動物のなかにも、人間のなかにもあらわれているのではないか。……そこでは、動物は人間と対等な意味をもつ。動物も人間と対等な同じ生命をもっているのである。そして、そこでえがかれるのは、動物と人間が共通にもっている生命の運命である」

しかし同時に宮沢賢治の心のなかには「大きな悲しみ」がある、と梅原はいう。なぜなら「すべての生きとし生けるものの世界は殺し合いの世界」であるから。この認識が修羅の思想の根本である、と梅原は見ているわけだ。そして修羅の世界をはなれて仏の世界へ行く道を示しているものこそ菩薩の思想である。「賢治はおのれを殺す利他の行によってのみ、仏の世界へ行けると考えていたようである」

宮沢賢治の詩や童話のなかにあらゆる生きものの親和の姿と、同時に生きもの同士のくらいあいの姿とを見つけることは、それ自体としてはまちがっていない。むしろ典型的な宮沢賢治の読み方ですらある。

七

ただあらゆる生きものは大きな生命の流れにいて、かつ殺しあいをしている、と論じたのでは、宮沢賢治の詩や童話を読んだときのこる、あの奇妙な不安感がふれられぬままになってしまう。この不安感はなかなかそれとは指摘できないのだが、たとえば『蜘蛛となめくじと狸』『蛙の消滅』あるいは『フランドン農学校の豚』といった童話を読むときとくに強く心にのこる、あのいやあな感じといったものである。生きものはアミノ酸の合成からはじまって、さまざまな複雑な進化・変転・分化・消滅の過程をへてきたわけだが、人間が人間となるためにどうしても切りすてざるをえないものがたくさんあった。そのとりのこされたあらゆる部分・器官・機能、あるいは人間以外の生きものがここにあつまり、切りすて、とりのこし、さきへすすんで行った人間の非を暗くとがめだて、うらめしく自分たちの闇によびもどそうとしている——悪夢ににた不安感をたとえていえばそうなる。

「生命の思想」はほんとうをいえば二面性をもっていたと思われる。一面ではそれは生きものの親和をいい、人間、動物、植物、鉱物、自然のあらゆるものが大きな生命の流れのなかにあるという宇宙像を結ぶ。しかし他面、あらゆるものがひとつの流れのなかにあるとは、境界がない、あるいはそれが流動的だということを意味する。人間は動物に、動物は植物に、等々それぞれが境界を失ってなんにでもなりうるわけである。だから人間が人間のままで他のひとや動物を殺すわけではない。人間は人間以下のものにおちて殺生するのである。げんみつにいえば、おちて行く不安のなかで殺生するのである。これが「修羅の思想」の中心にあるものだ。ふみしめていた足場をさっとひきぬかれたような崩落感ににた、読後の不安はここからくる。人間はけだもの以下のけだものにおちて、またその不安のなかで肉をくらう。人間はけだもの以下のけだものにおちて、またその不安のなかで性にひかれ性におびえ、まぐわい、子をなす。

八

あらゆる生きものが親和し、ひとつになる宇宙像はその裏面に、あらゆる生きものは堕落しうるという逆の過程をふくんでいる。ここでは〈人間〉という概念が固有のカテゴリーとして自立しないのだ。仏教のことばでいえば、〈人間〉はただ天に昇るか、地獄におちるかして行く、六道のうちの一道（階梯）でしかないわけである。人間として生きて行くこと、それが宮沢賢治にはどうしても了解できない。人間をこらえることが彼にはできないのである。

しかしおちて行くとして、なぜ〈修羅〉なのか？　なぜ〈畜生〉〈餓鬼〉ではないのか？　〈地獄〉ではなぜないか？　わたしはここにあるあいまいさを感じてならない。

（つづく）